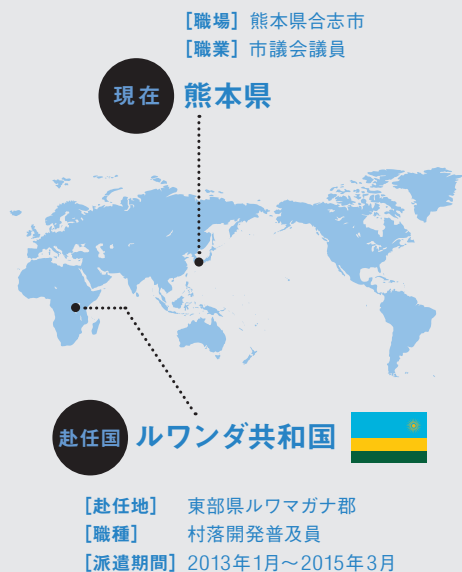




Uターン議員として住民の多様な声に耳を傾け、 多文化共生をめざす

中元 緑さん 熊本県合志市市議会議員
Midori Nakamoto

市議会議員として奮闘するJICA海外協力隊経験者（以下、JOCV）の中元緑さん。
転入外国人の増加に直面する合志市で、異文化経験者の視点から
住民の意識改革や地域との連携強化などの必要性を訴えます。

【 地元に戻り、 地方議会に挑戦 】

熊本県合志市の市議会議員、中元緑さんの活動の原動力は、JOCVとしてルワンダ共和国（以下、ルワンダ）に派遣された経験だ。

中元さんは、小学3年生から高校卒業までを合志市で過ごし、子ども会など地域に見守られながら育った。中学生の時に市の海外派遣事業に参加したことがきっかけで海外に興味を持ち、27歳の時にJOCVに挑戦。「子どもの頃からの夢を叶えたい」という強い思いが、当時、臨時教員として働いていた中元さんを後押しした。ルワンダでの活動を終え、再び生活の拠点として選んだのは、温

かい思い出が残る故郷・合志市だった。

ルワンダでの経験から、生活に必要な基本的なサービスを安定的に提供する行政の重要性を痛感した中元さんは、帰国後、合志市役所に入庁。同時に、公共政策を学ぶため大学院に進学した。やがて、政策と現場のズレに疑問を抱くようになり、「市の職員としてできることは限られている。地域を動かすなら違うポジションで挑戦したい」と、市議会議員への立候補を決意した。これまでの歩みを振り返りながら、「フルタイムで子育てをしながら働いて、本当に大変なことです」と話す中元さん。働く女性や母親、在住外国人など様々な立場を経験してきた姿が、多様な人々の心に響き、中元さんを当選へと導いたのだ

ろう。

現在は、海外に出て地元に戻ったUターン議員として、行政と地域住民とのつなぎ役となり、多角的な視点で地域課題の解決に取り組んでいる。特に、多文化共生と外国人支援は力を入れていきたいテーマの一つだという。近年、海外の半導体メーカーの拠点が県内にできたことで、合志市でも外国人転入





市議会議員として住民と行政のつなぎ役として活躍中



ルワンダでJICAが建設した給水施設の水質検査を行う



教育機関で水衛生に関わる啓発活動を計画・運営・実施

が増加している。中元さんはこれを行政が動く転機と捉えている。「外国人が家族で定住するようになった時、自治会加入や地域行事への参加など、住民を巻き込んで取り組むべき課題が出てくるだろう」と指摘する一方、「技能実習生など、従来の外国人にも目を向ける必要性がある」と、広い視野で多文化共生のあり方を見据える中元さん。いよいよ、経験と実績に裏付けされた高い実行力が発揮されるときがきたのかもしれない。

マライでのJOCV経験が 活動の原動力

JOCV時代の中元さんは、コミュニティ開発の隊員として給水施設の維持管理や水衛生に関する普及活動を行うなど、現地の住民とともに生活環境に密着した課題解決に奔走した。

「もっとも印象的だった」と話すのは、カウンターパートが日本の研修プログラムに参加し、帰国後に日本の上下水道設備の素晴らしさを熱弁した出来事だったという。同僚の前で誇らしげに語る姿を見た中元さんは、「外国人の私が

現地語で伝えることとは比べものにならないくらい、多くの人にインパクトを与えていました。実際に見聞きたことを、現地の言葉で、現地の人に伝えることの重みに気づかされました」と、自分の無力さを嘆いた。しかし、同時にそれは当事者意識の重要性を考えるきっかけともなった。まさにこの経験が、後に故郷に戻り、Uターン議員として多文化共生社会の実現を目指す中元さんの生きる道筋を照らすこととなる。

「みんなが満足するのは難しい」 議員としての葛藤

地域の将来に目を向け、常にポジティブな姿勢で行動する中元さんだが、もっとも難しい課題は合意形成だと話す。「いろんな人の話を聞いて、これが良いとなっても、どこかで不満を持つ人が必ずでてくる。すべての人々の満足に応えることができないのがいつももどかしいです」中元さんが初めてこうしたやるせなさを抱いたのが、市役所職員として地域おこし協力隊（以下、協力隊）を受け入れたときのことだった。「地域のため

中元 緑さん プロフィール

小学校3年生から高校卒業までを合志市で過ごす。JOCV参加を経て、合志市役所へ入庁。2022年3月に同職を退職し、2023年に同市市議会議員選挙に出馬し初当選。プライベートでは小学生ふたりの母親。

にと考えぬいた協力隊の提案に対して、行政としては『実行可能』という判断を下すことができなかった」JOCV時代、同じように懸命に行政機関に働きかけた経験があった中元さんにとって、協力隊が描いたプランは十分に理解することができた。しかし、行政の立場としては、結論が見出せず提案を受け入れることはできなかったのだ。多様な視点で考え行動する中元さんらしいエピソードではないだろうか。最後に、忙しい中元さんにとって息抜きはなにか?と尋ねてみた。「子どもといるとき…ですかね。一緒にしゃぐことで、何もかも忘れることができますね!」と笑顔で話す中元さん。こうした等身大の姿が、地方議員として地元住民の支持を集める所以だろう。そして、この姿は地域で奮闘する多くのJOCV経験者に希望と勇気を与えていくに違いない。

中元さんへの エール!

株式会社母家
代表取締役
溝尻 亜由美さん



中元さんが描く合志市の未来に期待

中元さんと一緒に会社を立ち上げ、子連れカフェや家事代行など、子育て世代をサポートする事業を展開中です。母親、市議会議員、会社役員と、さまざま顔を持つ彼女はとてもパワフル! JOCVの経験によって培われた多角的な視点やポジティブな思考に、いつもとても助けられています。当事者意識を忘れず、どんな課題にも正面から向き合う彼女だから描ける、合志市の未来があると信じています。